様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６７７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２５７４

研究課題名（和文）中欧文化研究におけるオーストリア論の機能と展望についての研究

研究課題名（英文）A Study on the Function and Prospects of Austrian Theory in Central European Cultural Studies

研究代表者
桂　元嗣（KATSURA, Mototsugu）

武蔵大学・人文学部・教授

研究者番号：４０６１３４０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：冷戦後の中欧研究におけるムージルのカカーニエン概念の機能と妥当性を、①同時代の作家によるオーストリア論との比較、②『特性のない男』生成過程との関係、③同概念の現在までの受容状況の分析、という3つの観点にもとづき研究した。ムージルのカカーニエンをめぐる言説は、同時代のオーストリア論がドイツ性やカトリック性など同国の具体的特性に依拠しているのとは異なり、特性をむしろ解体し、背景にある要素を取り出そうとする批判性を機能として持つ。これは非ドイツ語圏出身のオーストリア文学作家が、異なる二都市を「可能性としての風景」として重ね合わせる手法、両者の区別が重要でないような彼らの世界観として受け継がれている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「中欧」や「カカーニエン」といった概念についての研究は、国民国家的枠組みや言語集団的枠組みとは異なり、ヨーロッパの国境・言語横断的な文化的広がりを考察できる点で有効であり、またEU のような経済論理に根差した枠組みとは異なり、経済的に脆弱で発信力の弱い小国の文化的な存在意義を強調できる点に特色がある。なかでも本研究は、中欧文化を「カカーニエン」というキーワードで読み解く妥当性と問題点を探るうえでテクスト生成論や翻訳論といった文学的分析手法を用いる。それにより異なる民族や言語の「間」にある中欧ならではの文化状況をすくいあげることができる点に特徴と学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The function and relevance of R. Musil's Kakanien concept in Central European studies after the Cold War is studied from three perspectives: (1) a comparison with the Austrian theories by Musil's contemporaries, (2) its relation to the process of producing "The Man Without Qualities", and (3) an analysis of the reception of the concept to date. Unlike the Austrian theories of his contemporaries, which depend on the specific qualities of the country, such as its Germanness and Catholicism, Musil's Kakanien has the critical function of deconstructing the qualities and extracting the elements in the background. This is inherited as a method by non-German Austrian writers who superimpose two different cities as "landscapes as possibilities" and their worldview in which the distinction between the two is unimportant.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：中欧　オーストリア論　ムージル　カカーニエン　批判　翻訳　テクスト生成

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

R・ムージルの「カカーニエン」は、第一次世界大戦により崩壊したオーストリア＝ハンガリー二重君主国を表す文学的形象として長編小説『特性のない男』（第一巻：1930／第 2 巻：未完）に登場する造語である。この語はもともと二重君主国という国家形態のもつ存在論的な不可思議さを表している。しかし冷戦後は、旧ハプスブルク帝国領域を主な枠組みとする中央ヨーロッパの多民族・多言語的状況を示す新たなトポスとして使用されている。「中（東）欧」、「ドナウ圏」、「オーストリア的なもの」、「ハプスブルク」などの従来の中欧文化を考察する概念は、論者の立場によって異なる定義づけをされる多義的な概念であるが、「カカーニエン」という語もまたそれ自体で一人歩きし、ムージルが想定していた内実とは明らかに乖離している。

かつてのオーストリア＝ハンガリーにおける多民族・多言語的状況を 20 世紀に生じた国民国家という小さなコンテクストとは異なる大きなコンテクストとして見直そうという動きは、第一次世界大戦時から活発化しており、戦時報道局出身の作家の多くがその後オーストリアの独自性をめぐる発言を繰り返している。ムージルは大戦末期に戦時報道局で雑誌『故郷』を編集し、そののちオーストリア文化に関するそれまでの知識人の発言を批判しつつ彼独自のオーストリア論を展開している。このことから、「カカーニエン」概念の起源をさぐるうえで、ムージルおよび各作家の戦時報道局およびその後の動向を比較・分析する必要があった。

２．研究の目的

研究開始当初の研究目的としては以下の 3 点であった。

（1）ムージルの「カカーニエン」を、彼と同時代の作家および知識人による類似の概念と区別したうえであらためて定義し、中欧文化研究における機能を明らかにする。

（2）戦時報道局時代におけるムージルのオーストリア観がいかに『特性のない男』において「カカーニエン」として文学化するか、その生成過程を検証する。

（3）上記の（1）と（2）をふまえ、現在において中欧文化を考察するうえでカカーニエン概念を持ち出すことの妥当性を検証する。

３．研究の方法

当初の研究目的をふまえ、以下の 3 つのテーマ・方法にもとづいて研究を行った。

（1）カカーニエン概念と同時代の作家によるオーストリア論との比較：ムージルが第一次世界大戦中に所属した戦時報道局では、ドイツ系の H. v. ホーフマンスタール、F. ヴェルフェル、A. P. ギュータースロー、A. ポルガー、F. ブライ、A. クビーン、それにハンガリー系のモルナールなどがいた。このうちヴェルフェルのオーストリアに関する論考と短編小説を分析し、ムージルのカカーニエン概念および『特性のない男』との親和性や質的差異を探る。

（2）『特性のない男』生成過程との関係：ムージルは第一次世界大戦中、戦時報道局に勤めるかたわら、のちの『特性のない男』の構想を練っている。作品の構想が具体化するにつれてオーストリアは「カカーニエン」としてフィクション化・抽象化され、近代ヨーロッパ全体がムージルの考察の対象となる。カカーニエンをめぐるこの文学化の過程を、2016 年より刊行を開始した新版『特性のない男』の編集上の問題をふまえつつ、テクスト生成の分析を通じて明らかにする。

（3）カカーニエン概念の現在までの受容状況の分析：ムージルの「カカーニエン」に関連する文献（文学テクスト、論文等）を、時代ごとにわけて収集・分析し、その妥当性を探る。

４．研究成果

（1）同時代のオーストリア論との比較からうかがえるカカーニエン概念の機能：ムージルが第一次世界大戦中に所属した戦時報道局出身の作家は、戦時中は愛国主義的な立場にもとづき勤務していたが、戦後はそれぞれの特性に応じた立場（ドイツ・ナショナリズム的、ユダヤ的、カトリック的、マルクス主義的な観点）からオーストリアについての発言を繰り返している。なかでもヴェルフェルは時代と状況に応じて様々な立場から愛国主義的な発言を行う「ハプスブルク神話の作家の中で最も偏った、熱狂的な作家」（C. マグリス）であり、またムージルの思想的な「鏡像」（W. ラッシュ）として知られているため、ムージルの比較対象として取り上げた。ホーフマンスタール、H. バール、A. ヴィルトガンスらのオーストリア論と並び、ヴェルフェルが「オーストリア帝国についての試論」(1937)で示すオーストリアは、ナチズムへと至るデモーニッシュな共同体としての民族国家とは異なる、カトリック的伝統に根差した民族協調の「より高次な理念」があるとされる。しかしムージルによれば、オーストリアなる国家はこうした理念へと高められるような独自の文化など持ったためしがなく、むしろ「推進力となる理念」を欠いたまま放置された矛盾の寄せ集めである。同時代の作家が目の当たりにした現実のオーストリアと、ヴェルフェルらがかかげる理念としてのオーストリア像との間には著しい乖離があるが、ムージルはこの乖離を埋め合わせようと性急に非合理的な指導理念（これをムージルは「呪物（フェティッシュ）」と呼ぶ）へと導かれていく当時の人々の本能的な欲求を見て取り、これを「時代の症候」と呼んだ。カカーニエンとは、ムージルが『特性のない男』で展開するオーストリアの愛国運動を主な舞台とした虚構のオーストリアであるが、この概念は同時代の作家が繰り返し提唱する理念的なオーストリア像を解体し、背景にある「時代の症候」を取り出そうとする批判的機能をもつといえる。

（2）『特性のない男』生成過程との関係：（1）で確認した「時代の症候」を浮き彫りにするカカーニエン概念の批判的機能が、『特性のない男』のテクスト生成過程においてどのように形を成していったかについて、①1920 年代に書かれた「B 市」というエッセイ風の断片と、②1930 年代前半に書かれた『特性のない男』の草稿（「カカーニエンのとある都市についての記述」）、③1930 年代後半に書かれた第 2 巻のゲラ刷り原稿（第 49 章「シュトゥム将軍が爆弾を落とす。世界平和会議」）を比較しつつ考察した。B 市とは、ムージルが青春時代を過ごしたチェコのブルノ（ブリュン）のことである。①の断片で B 市は「カカーニエンにおけるもっとも模範的な形で（ドイツ人とチェコ人の）混合がなされた地域」と記述されるが、その平和はオーストリアの軍事関連施設が風景や自然のように都市に溶け込んで配備されることによって成り立っている。②の草稿において、B 市で暮らす人々はカカーニエンが本来さまざまな矛盾を内包する国家であることを知っており、むしろ「あまりにも早く静まりこんでしまった静謐さに対する不安」を抱えている。この草稿ではそれまで平和に共存していたドイツ系住民とチェコ系住民との間に暴力が生まれ、第一次世界大戦の火種となっていった背景について考察がなされる。ムージルは見せかけの秩序の背景に可能性として見え隠れする無数の矛盾や破局への予感で身動きが取れなくなってしまった市民に「知性主義」を見て取り、この知性偏重の傾向がいつしか反転して非合理的な指導原理（作中では「精神的に一律なもの」と呼ばれる、一種のフェティッシュ）に身をゆだねる原因となっていると分析している。ただし、ゲラ刷りまで至った③の 1930 年代後半のテクストにおいては、カカーニエンを描くことでなされるムージルの「時代の症候」に対する批判的分析は、作品構成原理である「構成的イロニー」によって背景へ退き、「世界平和会議」という、一見カカーニエンが直面することになる暴力とは関係ないような牧歌的な愛国運動へと転じている。暴力と愛という、一見しただけでは相反する価値を「可能性」の名のもとに結びつけながら作品構造においてそのつながりを示す点に、ムージル文学の特徴が表れている。

（3）翻訳を通じて見出される「可能性としての風景」：カカーニエンに関連する文献を、時代ごとに分類して収集・分析する過程で、カカーニエンを現実には存在しない「可能性としての風景」としてとらえる A. ボルテラウアーの論文(2007)に行き当たった。この論の妥当性を考察するために、ムージルとともに戦時報道局出身のユダヤ系作家であるモルナールの戯曲『リリオム』(1909)を、彼のハンガリー語のテクストをドイツ語に訳したポルガーの翻訳がもたらした影響をふまえつつ分析した。ポルガーはモルナールのハンガリー語を場面に見合ったウィーン方言に翻訳し、ブダペストの都市公園をウィーンのプラーター遊園地になぞらえるなど、ハンガリー語の戯曲をドイツ語圏の観客にとってなじみのあるものにしている。それだけではなく、場面によって異なる語を使い分けるモルナールのセリフをあえて同じ語の繰り返しで示すなど、ポルガー独自の解釈を翻訳に織り交ぜることによって、モルナールの描く愛に満ちたならず者としての主人公リリオムの両義性をより鮮明にしている。H. ヴァイゲルは『リリオム』にひそむ「悲劇的なことがしかしやはり陽気でもある、そして陽気なことが同時にきわめて悲痛をともなう」矛盾をはらんだ感情を「ハンガリー語で書かれているにもかかわらず」と留保づけながら「オーストリア的」であると位置づけた。しかしここでいう両義性に満ちたオーストリア的なるものは、むしろ翻訳という、ハンガリー語とドイツ語という異なる言語間の往復を通じて立ち現れるような虚構の空間においてこそはじめて示されるものである。ポルガー訳をつうじて生まれたブダペストでもウィーンでもないような舞台空間は、「カカーニエン的」とでも呼ぶほかないような中欧ならではの「可能性としての風景」を示しており、その点においてボルテラウアーの論の妥当性が見て取れると結論づけた。また、この「可能性としての風景」に関する考察から、M. ドールをはじめとする非ドイツ語圏出身の戦後オーストリア文学作家のテクストについて、ムージルの「カカーニエン」の影響をふまえつつ研究を行う道筋がついたため、今後の研究に生かしていきたいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 桂元嗣	４．巻 49（3・4号）
２．論文標題 カカーニエン生まれの聖人伝―モルナール『リリオム』におけるアルフレート・ポルガーの影響について	５．発行年 2018年
３．雑誌名 武蔵大学人文学会雑誌	６．最初と最後の頁 31-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 桂元嗣
２．発表標題 構成的イロニー再考 ―新版ムージル全集における編集上の問題とカカーニエン構想について
３．学会等名 日本独文学会秋季研究発表会（名古屋大学・文学II　E会場）
４．発表年 2018年

１．発表者名 桂元嗣
２．発表標題 「この時代」の文化批判―ムージルの「カカーニエン」とアウストロ・ファシズム
３．学会等名 日本独文学会秋季研究発表会・シンポジウムⅧ（「人殺しと気狂いたち」の饗宴あるいは戦後オーストリア文学の深層）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計3件

１．著者名 桂元嗣	４．発行年 2020年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 －
３．書名 中央ヨーロッパ―歴史と文学	

１．著者名 前田佳一（編）、山本潤、桂元嗣、杉山有紀子、日名淳裕	４．発行年 2017年
２．出版社 日本独文学会	５．総ページ数 92
３．書名 「人殺しと気狂いたち」の響宴あるいは戦後オーストリア文学の深層（日本独文学会研究叢書126）（論文「「この時代」の文化批判―ムージルの「カカーニエン」とアウストロ・ファシズム」を収録	

１．著者名 桂元嗣（編）、前田佳一、早川文人、須藤温子、日名淳裕	４．発行年 2016年
２．出版社 日本独文学会	５．総ページ数 89
３．書名 ウィーン1945-1966―オーストリア文学の「悪霊」たち―（日本独文学会研究叢書114）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考